

映画を持って、北から南へ 沿岸の人々に笑顔届けたい



みやこ映画生活協同組合 理事
シネマリン 支配人

榎桁 一則 さん

久慈市出身。シネマリンには、2001年からボランティアとして運営に関わり、2005年から支配人に就任。好きな映画は、ジュゼッペ・トルナトーレ監督の「ニュー・シネマ・パラダイス」。

いずみ助産院 助産師

佐藤 美代子 さん

盛岡市出身。県立病院、東京の助産院勤務を経て、花巻市に「母と子のサロンいずみ助産院」を開業。母乳相談、育児相談、各種教室を開催しているほか、市内保健センターや産婦人科などに非常勤勤務。

未来へキラリ 駆ける人

いわての「これから」に向かって進む人たちをご紹介します！

寄り添う助産師を目指して 沿岸地域でのサロンを開催



宮古市のマリノコープDORAにあるシネマリンは、市民活動によって生まれた、日本で唯一、生活協同組合が運営する映画館です。まちの小さな映画館として、人々に夢や希望、娯楽を提供してきました。震災後、一直後とはいえ、子どもたちは最新映画を楽しみにしているはず」と3月26日に営業を再開。映画に夢中になる子どもたちの笑顔を見て、榎桁一則さんは、「震災で映画を見たくても映画館に来られない人のために、こっちから出かけて行こう」と、沿岸部の仮設団地や公民館を巡回する、無料の出張上映会を平成23年5月から始め、現在も活動は続いています。

「子どもにはアニメを、大人には人情ものの楽しめる映画を上



新作映画のほか、市民のリクエストをもとに選ばれた映画も上映しています。

映しています。終了後は、用意したお茶でおしゃべりを楽しんだり。この時間だけでも、つらいことを忘れて、ほっとできればと願っています」と榎桁さん。しかし、映画のデジタル化が進み、新作映画については既存の機材で上映できるフィルムでの配給が大きく減り、作品によってはなくなることになりました。高額なデジタル上映用機材の必要性に迫られた榎桁さんは、「毎年恒例の新作アニメを楽しみにしている子どもたちのために」と、募金活動を開始。シネマリンの活動に共感した人たちからの募金で今年9月にデジタル化にこぎ着けました。

「各地を巡りながら、映画は人を勇気づける力があると感じました。続けられる限り続けたい。それが復興への力にもなるでしょうし、三陸唯一の映画館の役割とも思っています」と、これからも笑顔を届けるため、取り組んでいきます。

5年間の県立病院勤務、東京の助産院での1年間の修業を経て、平成21年に「いずみ助産院」を開業した佐藤美代子さん。開業助産師として活動しようと思ったのは、産婦人科が減る中で、子どもを産み、育てることに不安を抱える女性をサポートしたいと考えたから。「地域に安心して出産できる場所が少なかったり、育児の悩みを相談する相手が近くにいなかったりと、困っている女性がたくさんいます。そんな女性に寄り添える助産師になろうと思いました」と語ります。

県立病院に勤めていた頃から、仲間とともに北上市で妊婦や子育て中の女性を対象としたサロン「まんまるお月さま」を開催していた佐藤さん。手作りのお菓子とお茶を用意して、女性たちが気軽にしゃべりできる場をつくってききました。助産院でも毎月1回、お茶会を開き、さまざまに相談に乗っています。

震災後は、復興支援に力を注いでいます。被災妊産婦とその家族を花巻市の温泉施設に受け入れる事業の立ち上げに、「はな



釜石昭和園クラブハウスで行われた「釜石まんまるサロン」の様子。

ネット」「お産と地域医療を考える会」と共に携わり、「岩手県助産師会」として授乳・沐浴の指導、育児相談などを実施。この活動の中で、被災妊産婦が自分の思いをなかなか言葉にできないのを知った佐藤さんは、新たな取り組みとして「岩手県助産師会まんまるプロジェクト」を結成。佐藤さんを含めた助産師3名と栄養士1名が中心メンバーとなり、沿岸地域をはじめ県内各地で出張サロンを開催しています。「サロンでは育児の相談だけでなく、お母さんたちに少しでも心を軽くしてほしいと思い、ハンドマッサージも施します」と佐藤さん。妊娠・出産や育児に関する知識を持つ専門家であり、2人の子どもを持つ母親として、女性たちを支え続けています。